

松 山 大 学 論 集
第 31 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 9 年 12 月 発 行

外来語のアクセント付与について
—— 母音連続か二重母音か ——

櫻 井 啓 一 郎

外来語のアクセント付与について

—— 母音連続か二重母音か ——

櫻 井 啓 一 郎

1. は じ め に

二重母音 (diphthong) について、大塚・中島 (1989) は「一つの核音 (nucleus) を構成する母音が、音質 (quality) の推移を伴う音声器官の移動によってつくられ、しかも、その音質・音声器官の推移・移動が一方向にのみ向かうとき、その母音を二重母音という」と述べている。これまで日本語の二重母音については、様々な考察が示されてきた (川上 (1977) など)。

先行研究の中で、窪蘭 (2016) が音節とモーラを用いることで、/ai/, /oi/, /ui/ の3つを二重母音として定義し、検証を行っている。しかし、これまでの音節の定義が不明瞭であり、その原因は二重母音の定義が一致していないからである。

本稿では外来語に焦点を当てて、窪蘭の提唱する音節と二重母音の定義を尊重し、二重母音と連母音を区別し、二重母音つまり重音節 (heavy syllable) と連母音である軽音節 (light syllable) 連続の違いがそのアクセント付与に影響を与えることを示す。また窪蘭の定義する二重母音が、場合によっては母音連続の可能性もあることを示す。

二重母音はひとつの核音から成り、ひとつの音節を形成している。それに対して、連母音はふたつの核音がそれぞれ音節を形成し、それらが連続している。日本語は音韻部門の語彙層 (Lexical Strata) で、基本的にはモーラまたは音節を中心とする韻律単位によってアクセントが付与されている。それは語を

非常にゆっくりと発音したとき、音節とモーラの数と同数になるからである。しかし、場合によっては音節の数とモーラの数的一致せず、音節を韻律単位とする現象も見受けられる。このとき二重母音も連母音も全く同じ姿をしているが、二重母音の場合は語のモーラと音節は同数にならない。また外来語を取り入れる際に、音節の末尾子音には再音節化により、母音 /u/ が接続されるが、これはモーラに「合わせた」結果と考えられる。しかし、挿入された /u/ が再音節化の段階（語彙層後（Post-Lexical））で、削除される（/u/-deletion）こともある。

2. 日本語の二重母音とモーラ

窪蘭 (2016) はこれらの研究のうち、重なっている /ai/, /oi/, /ui/ を日本語の二重母音と仮定して、(1) の例を挙げて証明している。

- (1) a. /ai/ しょうない'がわ → しょうな'いがわ (庄内川)
 まさい'ぞく → まさ'いぞく (マサイ族)
- b. /oi/ おしろい'ばな → おしろ'いばな (おしろい花)
 トルストイ'でん → トルスト'イでん (トルストイ伝)
- c. /ui/ かいすい'よく → かいす'いよく (海水浴)
 こつずい'えき → こつず'いえき (骨髄液)
- (2) a. /au/ ドナウ'がわ → *ドナ'ウがわ (ドナウ川)
 b. /ao/ あさがお'いち → *あさが'おいち (朝顔市)
 c. /ae/ おおまえ'がわ → *おおま'えがわ (大前川)
 d. /eo/ ビデオ'しつ → *ビデオ'おしつ (ビデオ室)
 e. /oe/ アロエ'いち → *アロ'エいち (アロエ市)

(窪蘭 2016. p 23)

(1) と (2) の ['] は、この記号の前のモーラでアクセントが上がり（強勢付与）、その直後のモーラでアクセントが下がることを示している。これは金田一（1991）の「タキ」と同義である。日本語の外来語の名詞は後ろから数えて3モーラ目に強勢が付与されるのが通説であり、例えば「ホームラン」のように、後ろから数えて3つ目のモーラに接続している /mu/ に強勢が付与される。しかし、「アンパンマン」のように後ろから数えて3つ目のモーラが /N/ (nasal)、つまり特殊モーラ (special mora) のときは、同音節内にある直前の自立モーラ (autonomous (or regular) mora) にアクセントが移動する。/N/ が自立モーラか特殊モーラかに関しては、これまでもいろいろと論じられてきた。Labrune (2012a, 2012b) は日本語の音韻構造には音節の影響力が少ないことを論じているが、Kawahara (2016) は日本語と音節の深い関係性を論じている。

第1に、末尾子音 (coda) としての鼻音の /N/ は、その鼻音が存在する音節の核音 (nucleus) である母音が長く発音されたとき、通常よりも短めに発音されるが、これは音節構造をひとつの韻律単位と考えられる証拠となっている。

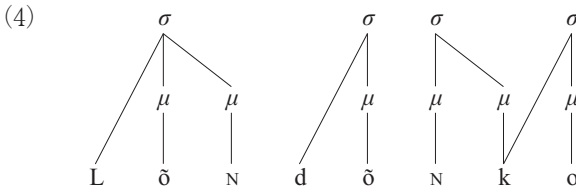
2番目に Kawahara は Vance (2008) の日本語の音節構造の例を引用して、同音節の末尾子音である鼻音が核音に与える影響を説明している。

- (3) a. [hõN] 'book' b. [ho.ne] 'bone'
 [hõn.da] 'Honda' [ko.me] 'rice'

(Kawahara 2016. p 173)

(3a) のそれぞれの語の最初の音節内にある鼻音は、その直前の核音 /o/ を同化 (assimilation) により、鼻音化 (nasalization) しているが、直後の音節の頭子音である /N/ と /d/ には影響を及ぼすことはないため、[hõN] と [hõn] のような音節構造の単位を考えざるを得ないが、(3b) はどちらの鼻音も前の音節の核音に影響を及ぼしていない。これにより、鼻音の前の音節構造 [ho] と [ko] を考慮しなければならないことが証明されたことになるとしている。

窪菌(1993)は「ロンドンっ子」など「○○っ子」の例を出して、鼻音へのアクセント付与の存在から鼻音が特殊モーラではなく自立モーラの役割を担っていることを示している。窪菌は日本語の音節構造の存在を前提として、鼻音の自立モーラとしての役割を認めている。



窪菌は日本語の音節構造について認めながら、特殊モーラと考えられる鼻音を自立モーラとすることで、その後に来る「っ」(促音)について処理している。ただしこの窪菌の主張では「ロンドン」の後の方の /N/ にアクセント付与されることになるが、実は「ロンドン」までは平板調の発音である。つまり最初の /N/ にアクセント付与の後、最後の /o/ でアクセントが落ちる「タキ」の現象が起きている。後の /N/ ではなく、初めの /N/ にアクセントが生じるため、最初の方の鼻音が自立モーラの役割をしているのである。もちろん後の /N/ もアクセントを保っているので、自立モーラであることは明確である。鼻音が特殊モーラとして音節の末尾子音の役割をしているのか、それとも自立モーラとして核音を形成しているのかはその語の置かれている環境による。また促音や伸ばす音や、二重母音といわれている /ai/, /oi/, /ui/ など重音節を形成しているとは限らない。

原則として、外来語アクセントは以下のような規則で付与される。

(5) 外来語アクセント規則

- a. 語末から数えて3つ目のモーラにアクセント核が与えられる。

(窪菌・太田 2012. p 27)

- b. 語末から数えて3つ目のモーラを含む音節にアクセント核を付与する。

(窪菌・太田 2012. p 39)

この現象を説明するのに、窪菌 (2016) は上記のふたつのアクセント付与規則を用いるよりも、「後ろから数えて3つ目のモーラが特殊モーラの場合は、その特殊モーラが所属している音節に強勢が付与される」とすれば、ひとつの規則で処理できるとしている。つまり、「アンパンマン」の場合、うしろから数えて3つ目のモーラである /n/ を特殊モーラと仮定すると、/n/ が存在している音節 [pan] の核音である /a/ に強勢が付与されることになる。音節の強勢は頭子音や末尾子音 (coda) に付与されることはない。

大和ことばについても外来語と同じく、原則として末尾から数えて3つ目の自立モーラに強勢が付与される。(1) の3つは日本語の二重母音として考えられる。アクセント付与規則に従えば、(1a) の「庄内川」では、本来後ろから数えて3つ目のモーラである「い」にアクセントが存在すべきであるが、そうならないのは「い」が「ない」という音節の特殊モーラと考えられるからである。つまり「ない」[nai] は、窪菌のいう日本語の外来語の二重母音であり、ひとつの音節と考えられる。同じように、(1b, c) についても、後ろから数えて3つ目のモーラに来るべき強勢が、その直前のモーラに付与されているのは [oi] と [ui] がひとつの音節と想定できるからである。

しかし、(2) についてはどの語も後ろから数えて3つ目のモーラに強勢が付与されているため、いずれの音も自立モーラと考えられる。その直前の分節音も自立モーラであるため、これらは重音節つまり二重母音ではなく、母音連続と考えられる。

上記の例から、日本語は後ろから数えて3つ目のモーラに強勢が付与されるのが原則であるが、そのモーラが特殊モーラの場合、その直前の自立モーラに強勢は移動し、隣り合った自立モーラと特殊モーラがひとつの音節を作っている、つまり二重母音であることがわかる。しかし、母音が連続していても、後の方の母音に強勢が付与されている場合は、その母音は特殊モーラではないので、それらの母音は二重母音ではなく母音連続と考えられる。

外来語についてはすでに後ろから数えて3つ目の自立モーラに強勢が付与されることは述べたが、それは全ての外来語について当てはまるのであろうか。

3. 外来語（地名）のアクセントパターン

櫻井（2013）は外来語のアクセントのパターンとして、2モーラ語と原則3モーラ語の場合は高低パターンと高低低パターンであり、（櫻井（2013）では高低パターンを「HLパターン」（Hをhigh, Lをlight）と表記していたが、本稿では他の研究に合わせて高低パターンはそのまま「高低パターン」とし、Hは「重音節」（heavy syllable）、Lは「軽音節」（light syllable）を表わす）、4モーラ以上の語になると、「低高高高」、「高低低低」、「低高低低」のいずれかのアクセントパターンに分類できるとしている。3モーラ語について「原則」としているのは、2モーラの外来語の地名は計24個しか存在せず、それらすべてが高低パターン」であるのに対して、3モーラ語160個のうち156個が高低低パターンであり、全ての3モーラ語がそのパターンということではないからである。さらに4モーラのパターンは上記の3つのアクセントパターンの他に低高高低パターンがあるが、「アジャンタ」、「サンホセ」、「デラウエア」、「ノルウェー」と「ベルギー」の5つしか存在していない。この中の「サンホセ」は低高高高パターンもあり、実質的に低高高低パターンのみの例は4つしかないため、この4例について今回は例外と見做し、議論の対象から外すことにする。

櫻井（2013）は2モーラと3モーラの語が「高低」と「高低低」のふたつのパターンしかないことから、これらはそれぞれ韻脚（foot）としての鋳型を形成

しており、4モーラ語についてはこのふたつの韻脚に別の韻脚もしくはモーラが組み合わさった形態を取っているのではないかと主張している。しかし、櫻井(2017)において、上述の3つの4モーラパターンは単に韻脚やモーラの組み合わせではなく、韻律語(prosodic word)とすべきであるとも述べている。それは「高低」や「高低低」が韻脚であれば、それよりもひとつ大きな単位を考えなければならないからである。

これら外来語の二重母音を考察したとき、2章で述べた大和ことばの原則に合わないことがわかる。それは(6a)の「アイオワ」や「アイダホ」の/ai/について、窪菌(2016)の定義ならば二重母音と捉えることができるが、実際は/i/にアクセントが付与されているため、/ai/を重音節つまり二重母音とは考えられないからである。また4モーラ語は、2モーラ語と3モーラ語を鋳型としたパターンに、ひとつもしくはふたつのモーラが加わってできたとする説も(6a)が存在する為、弱いことがわかる。それは「高低」もしくは「高低低」を土台とした場合、(6b)は「高低+低+低」、(6c)は「低+高低+低」と考えることができるが、(6a)は2モーラ語も3モーラ語も土台とすることができないからである。つまり、(6a)のパターンは(ア)(イ)(オ)(ワ)のように短音節の組み合わせと捉えるしかない。/ai/は二重母音ではなく、母音連続と考えられる。

- (6) a. 低高高高パターン：アイオワ、アイダホ、アドリア、アフリカ、アブダビ.....
- b. 高低低低パターン：アーヘン、アイガー、アスワン、アッサム、アバダン.....
- c. 低高低低パターン：アビニオン、アムール、イエメン、ウイグル、ウガンダ.....

ほとんどの4モーラ語の音韻パターンが(6)の3つであるが、これらは上記の理由により「4モーラ語独自の鋳型」として考慮されるべきであろう。高低の2モーラ語のパターンについては、3番目のモーラが存在しないので、最初のモーラにアクセントが付与される。また3モーラの高高低と4モーラの低高高と低高低低のパターンは語末から数えて3番目のモーラにアクセントが付与される。しかし、(6b)の高高低低パターンだけは後ろから4番目にアクセントが付与されている。もしも語末から3番目が特殊モーラであるなら、その直前の自立モーラにアクセントが移動することが考えられるが、(7)に見られるようにそのような条件にない語が数多くある。

- (7) 高高低低パターン：アスワン、アバダン、アマゾン、(アルプス)、ウスリー、(オレゴン)、カフカス、カムラン、(カラカス)、(キツリン)、キプロス、キリバス、ケイマン、ケベック、ザクセン、ザクレブ、(シアトル)、シドニー、スリナム、セネガル、セレベス、ソビエト、ソロモン、ダブリン、チグリス、テキサス、テヘラン、トゥルファン、ハドソン、ハルビン、ビスケー、ビリニュス、ピルゼン、ピレネー、ボストン、ポツダム、ボルドー、ホルムズ、マゼラン、マラウイ、マラトン、ミシガン、ヨルダン、リスボン、レバノン
- (この中の「アルプス」、「オレゴン」、「カラカス」、「キツリン」、「シアトル」の5つは他の韻律パターンと重なっているため、括弧を付けている)

(7)の中からいくつか取り出して、その構造を観察してみると、以下の(8)のような音節構造をしていると仮定できる。これらはいずれも語末から数えて3モーラ目にアクセントが付与されていないし、3モーラ目が音節の特殊モーラというわけでもない。

- (8) a. (ア)(ス)(ワン)
 b. (ウ)(ス)(リー)
 c. (カ)(フ)(カ)(ス)
 d. (ケ)(ベツ)(ク)
 e. (ザ)(ク)(レ)(ブ)
 f. (ホ)(ル)(ム)(ズ)
 g. (ス)(リ)(ナ)(ム)
 h. (マ)(ラ)(ウイ)
 i. (セ)(ネ)(ガ)(ル)
 j. (ソ)(ビ)(エ)(ト)

(8a), (8b), (8d) そして (8h) から、「音節を単位として、語末から数えて3つ目の音節にアクセントが付与される」ことはできないであろうか。しかし、その他の例は4音節4モーラ語であり、「音節を単位として、語末から数えて3音節目」もしくは「モーラを単位として、語末から数えて3モーラ目」へのアクセント付与のどちらを使っても対処することは不可能である。

4. 外来語（地名）の音節化

前章の(8)からわかるように、例えば「アスワン」の最後から3番目のモーラは「ス」であるが、実際のアクセントはその直前の「ア」に付与されている。この場合の対処の方法として、最後の /wan/ はひとつの音節を形成し3音節語と考えれば、「語末から3番目の音節にアクセントを付与する」とすることができる。しかし、(8c)の「カフカス」、(8e)~(8g)の「ザクレブ」、*「ホルムズ」*、*「スリナム」*、それに(8i)と(8j)の「セネガル」と「ソビエト」については説明がつかない。

では何故このように、外来語は他の日本語（大和ことばや漢音・唐音・呉音などの古来中国から入ってきた語）とは異なるのであろうか。これを解くカ

ギとして、語末の /u/ の音に注目する。(8) に挙げた例の語末の音に注目すると、そのほとんどが /u/ で終わっていることがわかる。それらは (9) のようなパターンに分類される (他のパターンと重なっている 5 語は除外する)。

- (9) a. 語末が「ス」で終わるパターン (カフカス, アスワンなど)
 b. 語末が「ク」で終わるパターン (ケベック, ザクレブなど)
 c. 語末が「ブ」で終わるパターン (ザクレブなど)
 d. 語末が「ズ」で終わるパターン (ホルムズなど)
 e. 語末が「ム」で終わるパターン (スリナム)
 f. 語末が「ル」で終わるパターン (セネガル, ホルムズなど)

(9) でわかるように、音節に分けて「ウ行」の音から /u/ を削除 (/u/-deletion) し、残った頭子音を直前の音節の末尾子音として再音節化 (resyllabification) した結果、それが韻律パターンに影響を与えていると考えられる。

ここで注目すべき点は、(8a) の「アスワン」、(8b) の「ウスリー」、(8h) の「マラウイ」と (8j) の「ソビエト」以外の全て語に /u/ の音が語末に来ていて、/u/ の削除の後で再音節化されて重音節を形成していると考えられる。このことは (10c) の「言語の無声化現象」から説明できる。無声化現象により、上述のように核音の母音が削除されることで頭子音が残りに、再音節化により直前の音節と接続される。(9) のような「ウ行」の音で終わる語については、核音が削除され、頭子音が残りに、直前の音節に末尾子音として接続されたものといえる。

窪蘭 (2013) によると、言語の無声化現象とは (10) のような条件が「複合して起こるらしい」と述べている。

- (10) a. 西日本（近畿，中国，四国地方）より東日本（関東地方）で起こりやすい。
- b. ふたつの高母音 [i] [u] に起こりやすく，他の3つの母音には起こりにくい。
- c. 無声子音に挟まれた環境か，無声子音と語境界の間に起こりやすい。

（窪蘭 2013. p 40）

東京方言の語末の「～ます」，「～です」などの /su/ が /s/ に近い音に聞こえるのは，(10) のような理由があるからであろう。(10a) について，上述の例として挙げた外来語の地名の出典は，日本語の標準語といえる NHK の発音に従っているので，東日本（関東地方）の方言に近いといっても良いであろう。また外来語は本来，日本語に取り入れられたときは音節で導入されているケースがほとんどなので，「日本語の発音になる」際に末尾子音を頭子音にして，核音 /u/（日本語には「トゥ」の標記や音が存在していなかったため，/t/ の後 /o/）を挿入する形が取られた。また外来語が取り入れられたときには，核音は存在していなかったため，もとの音節言語に「寄った」発音をする場合，最後の /u/（/t/ の後 /o/）は発音されず，語末の音節は末尾子音を含む重音節としての役割を持っていても不思議ではない。日本語化するために，/u/ を語末に挿入した後で，その /u/ 音がイントネーションの結果，削除されたのか，それとも原語のアクセントを尊重したため，導入された当初から /u/ は存在しなかったのかのどちらかであると考えられる。「ソビエト」の場合，日本語化した結果，/t/ の後には上記の理由により /u/ が挿入されない代わりに，/o/ が挿入されていると考えられる。/t/ の場合，/u/ を入れて /tu/ にすると，「ツ」の発音となり，元の音から離れてしまうため，/o/ の音を入れたのであろう。

注目すべきは (10c) であり，語中では「無声子音の間でない」と無声化されない」ことである。この環境に合わせて音節化すると，(8) は (11) のような音節構造をしていると仮定できる。

- (11) a. (ア)(ス)(ワン)
 b. (ウ)(ス)(リー)
 c. (カ)(フ)(カス)
 d. (ケ)(ベック)
 e. (ザ)(ク)(レブ)
 f. (ホ)(ル)(ムズ)
 g. (ス)(リ)(ナム)
 h. (マ)(ラ)(ウイ)
 i. (セ)(ネ)(ガル)
 j. (ソ)(ビ)(エト)

これらはすべて音節を韻律の単位とし、アクセントを付与されているのであり、大和ことばのようにモーラを単位とするものとは異なると考えられる。(11a)~(11c)と(11e)~(11i)は全て、「後ろから数えて3音節目」にアクセントが付与されている。(11d)は2音節であり、2音節の場合は2モーラ語のように(2モーラ語は最初のモーラにアクセントが付与される)、最初の音節にアクセントが付与されると考えられる。これらは「後から数えて3モーラ目」にアクセントが付与されるとはいえない。3音節語については、3モーラ語が高低低パターンしか存在しないことから、同じように「モーラを韻律単位とした高低低パターン」ではなく、「音節を韻律単位とした高低低パターン」とすることはできないだろうか。つまり、『モーラ単位』の語は語末のモーラから数えて3モーラ目にアクセントが付与」され、高低低低パターンのような『音節単位』の語は語末の音節から数えて3音節目にアクセントが付与」されると仮定できないか、ということである。

もし無声化現象が語のどの位置でも適用されて、語中の母音 /i/ と /u/ が無声子音にはさまれることなく無声化現象が起こると仮定すると、(11)は(12)のように書き換えることができる。「アスワン」は(アス)(ワン)、「ウスリー」は

(ウス)(リー)となり、後ろから数えて3番目のモーラが特殊モーラのため、同音節中の直前にある自立モーラにアクセントが移動する。これにより、それぞれ「ア」と「ウ」にアクセントが付与されることになるが、モーラを韻律単位としてアクセントを付与した場合、「スリナム」、「マラウイ」、「セネガル」の3つは(ス)(リ)(ナム)、(マ)(ラ)(ウイ)、(セ)(ネ)(ガル)と音節分けされ、それぞれ「リ」、「ラ」、「ネ」にアクセントが間違っ⁶て付与されてしまう。つまり音節を単位としてアクセントを付与した場合、正しいアクセント付与が行われるのである。

- (12) a. (アス)(ワン) [as] [wan]
 b. (ウス)(リー) [us] [rii]
 c. (カフ)(カス) [kaf] [kas]
 d. (ケ)(ベック) [ke] [bekk]
 e. (ザク)(レブ) [zak] [reb]
 f. (ホル)(ムズ) [hor] [muz]
 g. (スリ)(ナム) [sur] [nam]
 h. (マ)(ラ)(ウイ) [ma] [ra] [wui]
 i. (セ)(ネ)(ガル) [se] [ne] [gar]
 j. (ソ)(ビ)(エト) [so] [bi] [et]

上記の(12a)～(12c)と(12e)～(12g)はHHの形の音節を取った語であり、最初の音節にアクセントが付与されると仮定することができる。2音節の語も3音節の語も最初の音節にアクセントが付与されると仮定することが可能である。(11)のような音節パターンを取っても、(12)のような音節パターンを取っても、語末から2～3番目の音節にアクセントが付与される。ただし、(スリ)(ナム)や(ホル)(ムズ)などは[sur][nam]や[hor][muz]と発音されることはない([ru]の[u]の音が消えることはない)ことと、(10c)を尊重する

と、音節構造はやはり(11)と考えるべきであろう。

またどうして最初の音節中の核音にアクセントが付与されるのに、その次の音節では下がるのかについては、「語の初めの軽音節の連続のアクセントは同じにならない」ことから説明できる。語頭の音節が重音節の場合、最初のモーラでピッチが上がり、次のモーラで下がるが、重音節でないにも関わらず、最初の軽音節が「高」であれば、その次の軽音節は「低」となり、その逆もありうる。つまり、(ス)(リ)(ナム)や(ホ)(ル)(ムズ)のように音節化された語は、「後ろから3音節目」の「ス」と「ホ」にアクセントが付与されるが、直後に別の軽音節が来て(つまり /sur/ や /hor/ のような重音節でないにも関わらず)、ピッチは落とされる。そして一度下がったピッチは二度と上がることはない。

5. 3つの音韻パターン

外来語の地名の中で4モーラの語は、櫻井(2013)から「低高高高」, 「高低低低」, 「低高低低」の3つのパターンに絞られることが判明している。紙面の都合上、4モーラ語について、「ア行」と「カ行」からのみピックアップし、それらのアクセントパターンを考察してみる。

(13) a. 低高高高

アイオワ, アイダホ, アドリア, アブダビ, アフリカ, アメリカ, アユタヤ, アラスカ, アラバマ, アラビア, アラフラ, アリゾナ, アルプス(高低低低), アンカラ, アンゴラ, イオニア, イギリス, イベリア, イリノイ, ウルムチ(低高低低), エジプト, エルパソ, エンテベ, オハイオ(低高低低), オランダ, ガイアナ, カイナン, カウアイ, カナリア, カラハリ, カルタゴ, カンパラ, キプロス(高低低低), キャンベラ, キンシャサ, グラナダ, クリミア, グルジア, グレナダ, コルカタ, コルシカ, コルドバ, コロラド

b. 高低低低

アーヘン, アイガー, アスワン, アッサム, アバダン, アマゾン, アルザス, アルプス (低高高高), アンデス, アンマン, イートン, インダス, インチョン, ウィンザー, ウェールズ, ウンナン, エッセン, オーデル, オレゴン (低高低低), オングル, カイバル, カフカス, カムラン, カラカス (低高低低), カンザス, ガンジス, カンシュク, カントン, ガンビア, キツリン (低高低低), キプロス (低高高高), キリバス (低高低低), ケイマン, ケベック (低高低低), コーカイ, コッカイ

c. 低高低低

アビニョン, アムール, イエメン, ウイグル, ウガンダ, ウルムチ (低高高高), オデッサ, オハイオ (低高高高), オマーン, オレゴン (高低低低), カタール, カタンガ, カピサン, カブール, カラカス (高低低低), キツリン (高低低低), キリバス (高低低低), クウェート, クラクフ, ケベック (高低低低), コロンボ
(括弧付きのアクセントパターンを持っている語は2通りの読み方が存在することを表している)

(11) では高低低低パターンの外来語を見てきたが、次に低高低低パターンについて考察する。これらは「語末から3モーラのところにアクセントを置く」規則で解決する。試しに高低低低パターンの語のように、外来語は音節を韻律単位としていると仮定し、例として、「アビニョン」, 「アムール」, 「イエメン」, 「ウイグル」, 「ウガンダ」の5つについて考察してみる。これらはそれぞれ(ア)(ビ)(ニョン), (ア)(ムー)(ル), (イ)(エ)(メン), (ウイ)(グル), (ウ)(ガン)(ダ)となり、3音節語の場合、語の最後から3音節目に、2音節語の場合は、語の最後から2音節目の核音にアクセントを付与するのであれば、それぞれのアクセントは /a/, /a/, /i/, /u/, /u/ に付与され、誤った結果となる。つまりこれらの語はすべてモーラを韻律単位として語末から3番目のモーラにアクセ

ントが付与されるべきなのである。

では何故低高高高パターンの語については、後ろから数えて3モーラ目の音にアクセントが付与されるのに対して、これら平板調の語だけは低高低低パターンの語のように3モーラ目でアクセントが下がらないのであろうか。低高低低パターンの語は2番目のモーラにアクセントが付与されるが、そのままピッチが下がり、低高高高の平板調のパターンにならないのは、上述の「タキ」が大きな役割を果たしていると考ええる。つまり、「タキ」は長母音もしくは二重母音、そして日本語の場合は撥音や促音を含む特殊モーラが末尾子音の重音節のとき、その音節の最初のモーラから次に来るモーラへアクセントが下がる現象のことである。(13c)の語のうち、他のアクセントパターンを持っている語を除くと、「アビニョン」、「アムール」など14個あるが、そのうち9個がLHLのパターンである。仮に語中の /gu/, /mu/, /ku/ の核音も削除されると仮定するなら、実に11個がLHLとなる。これを音節中の「タキ」が関わっているとすると、Hはかならず「高低」にならなければならないので、平板調のように「高」が続くことはない。

低高高高パターンの特徴について、これは平板調と呼ばれるパターンであり、(14)のように、「最後の2音節が軽音節の連続であるとき」に、このパターンになる確率が高い。

(14) 語末が軽音節の連続で終わる4モーラ語は平板化しやすい。

(窪菌 2013. p.207)

低高高高パターンの語については、「日本語(東京方言)の語彙の約半数をこのアクセント型が占めている(窪菌 2013)。」しかし、窪菌は「外来語に限って言うと、このタイプの語の比率はきわめて低く10%程度にすぎない」とも述べている。(13)に挙げた「ア行」と「カ行」の外来語の地名を調べたところ、10%よりも多い結果となった。

(15) 低高高高パターンの語で語末が軽音節連続の外来語

アイオワ, アイダホ, アドリア, アブダビ, アフリカ, アメリカ, アユタヤ, アラスカ, アラバマ, アラビア, アラフラ, アリゾナ, アルプス (高低低低), アンカラ, アンゴラ, イオニア, イギリス, イベリア, ウルムチ (低高低低), エジプト, エルパソ, エンテベ, ガイアナ, カナリア, カラハリ, カルタゴ, カンパラ, キプロス (高低低低), キャンベラ, キンシャサ, グラナダ, クリミア, グルジア, グレナダ, コルカタ, コルシカ, コルドバ, コロラド

(15) は「ア行」と「カ行」の外来語の地名で、語末が軽音節連続の平板調アクセントの語の例であるが、音節分けすると以下のように分けることができる。

- (16) a. HLL : アイオワなど 9 語
 b. HH : 0 語
 c. LLLL : アドリアなど 27 語
 d. LHL : 0 語
 e. LLH : アルプスなど 2 語

(16) はア行とカ行に限られているが、全体の割合はそれほど変わらないと想像できる。(16e) を除けば、HLL と LLLL のふたつの韻律パターンに限定することができる。「アイオワ」と「アドリア」を例にとると、それぞれ (アイ) (オ) (ワ) と (ア) (ド) (リ) (ア) と音節分けできるが、どちらも「後ろから 3 モーラ目」にアクセントが付与される。つまりこれらの語はモーラを単位とした語であり、もしも音節を単位として「後ろから 3 音節目」にアクセントが付与されると仮定すると、「アイオワ」の場合、/a/ に間違っただけでアクセントが付与されることになる。/ai/ をひとつの音節と捉えれば、特殊モーラにアクセント

が付与されていることが問題となる。この場合、/i/が特殊モーラであり、音節の中で自立モーラを押しつけてアクセントを獲得することは不可能だからである。

(13)でわかる通り、語末が軽音節の連続で終わる外来語のうち、平板化していない語は、アルザス、アルプス、アンデス、インダス、ウェールズ、オーデル、オングル、カイバル、カフカス、カラカス、カンザス、ガンジス、カンシュク、ガンビア、キプロス、キリバス、ウイグル、ウルムチ、クラクフなどが存在している。これらの語を「音節分け」する際に、上述のように子音の無声化現象を考慮に入れた場合、その数はHHの11例とLLHの8例となる。これらの語は後ろから2～3番目の音節にアクセントが付与されるためである。その結果、最初の音節のモーラにアクセントが与えられ、次のモーラはそれが重音節の後のモーラであろうと軽音節であろうと、ピッチは下がることになる。

それに対し、(15)の語のほとんどがLLLLの4音節語である。そのため後ろから3音節目にアクセントが付与されると仮定すると、「アイオワ」や「アイダホ」などの語も(ア)(イ)(オ)(ワ)や(ア)(イ)(ダ)(ホ)のように、本来であれば1音節を形成する二重母音と解釈されるべき/aɪ/の音も母音連続であり、2音節と捉えると「語末から3音節目にアクセントが付与される」規則で説明がつく。語頭の/aɪ/はアクセントが「語末から3モーラ目に付与される」場合は、二重母音とは考えられない。もし二重母音であるなら、語末から数えて3モーラ目は/i/であり、音節中の後の方の核音が前の核音よりもピッチが高いことはありえないからである。二重母音の/aɪ/のうち/a/の方がピッチが高くないといけない。つまり「アイオワ」や「アイダホ」は軽音節が4つで構成されなければならないのである。

窪蘭の調査によると4モーラ地名の平板式アクセント語彙の音節構造は語末がLLのときは91%、HLは3%、LHは6%、HHのときは0%となっているので、ほぼそれに沿う形となっている。平板化は日本語独特のアクセントであり、平板化している事実がその単語が「大和ことばに近い存在」となっている

ことを示すものであろう。つまり「アメリカ」や「フランス」などは外来語というよりは、大和ことばに近くなっているということである。こういった基準で「大和ことばに近くなる」のかは不明である。ただ上述したように、低高高高パターンの語は低高低低のパターンの語と異なり、2番目と3番目のモーラが同じ音節、つまり重音節を形成している割合が少ない。(13)では皆無であるのに対して、(13c)では21例中10例を確認することができる。この2番目と3番目のモーラを保有している重音節によって、ピッチの高低が決定すると仮定することができる。つまり「タキ」の部分がアクセント付与に関して、大きな意味を持っているのではないかと考えられるのである。

また上記の音節構造のうち、LLHは特殊なアクセントを持つ形であることを窪藪は述べている。

- (17) a. アマゾン, マゼラン, ブルペン, テネシー, トロフィー
b. アセアン, ビタミン, イエメン

(17a)と(17b)はともにLLH型の外来語であるが、前者は「語末から3モーラ目」ではなく、そのモーラの直前のモーラにアクセントが付与されているのに対して、後者は「語末から3モーラ目」にアクセントが存在している。窪藪の調査によると外来語地名の27例中21例がこの原則に反していることが判明している。

このことについて、上述したように、「音節単位の単語は後ろから数えて3音節目」にアクセントが付与され、「モーラ単位の単語は後ろから数えて3モーラ目」にアクセントが付与されれば解決する。(17a)の外来語は音節単位の単語であり、(17b)はモーラ単位の外来語ということである。ただしどの語が「音節単位」で、どの語が「モーラ単位」とするのか、その基準については不明である。「モーラ単位」の語は日本語に取り入れられて、日本語に「馴染んだ」のかもしれないし、「音節単位」の語は日本語に取り入れられる前のもと

の英語を尊重したのかもしれない。

これまでのことをまとめると、(13a)と(13c)はモーラを単位として、後ろから3番目のモーラにアクセントが付与されているのに対して、(13b)は音節を単位として後ろから3番目の音節にアクセントが付与されていることになる。2通りの読み方が存在している語については、それぞれ韻律単位が異なる。

- (18) a. 低高高高と高低低低
 アルプス, キプロス
 b. 低高高高と低高低低
 ウルムチ, オハイオ
 c. 高低低低と低高低低
 オレゴン, カラカス, キツリン, キリバス, ケベック

(18)の例はふたつのアクセント型が存在している外来語で、それらをそれぞれ音節とモーラの単位に分けると、以下ようになる。それぞれ最初がモーラ単位、後が音節単位で分けている。

- (19) a. (ア)(ル)(プ)(ス)と(ア)(ル)(プス), (キ)(プ)(ロ)(ス)と(キ)
 (プ)(ロス)
 b. (ウ)(ル)(ム)(チ)と(ウ)(ルム)(チ), (オ)(ハ)(イ)(オ)と(オ)
 (ハイ)(オ)
 c. (オ)(レ)(ゴ)(ン)と(オ)(レ)(ゴン), (カ)(ラ)(カ)(ス)と(カ)
 (ラ)(カス), (キ)(ツ)(リ)(ン)と(キツ)(リン), (キ)(リ)(バ)(ス)
 と(キ)(リ)(バス), (ケ)(ベ)(ッ)(ク)と(ケ)(ベッ)(ク)

(19a)の「アルプス」と「キプロス」では、それぞれモーラ単位では語末から3番目の /u/ に、音節単位では語末から3番目の音節の核音である /a/ と /i/ に

アクセントが付与される。モーラ単位で「低高高高」の平板調であるのは、語末が軽音節の連続からなっているからであり、2番目と3番目のモーラが重音節を形成していないからである。(19b)の「ウルムチ」と「オハイオ」では、音節単位では(ル)と(ハ)の核音である/u/と/a/にアクセントが付与され、特殊モーラでピッチが下がる(つまり「タキ」)ことがわかる。モーラ単位でも語末から3番目のモーラである/u/と/a/にアクセントが付与され、語末が軽音節連続なので平板調となる。(ウル)と(ハイ)を(7)で考察したように1音節と捉えると、その核音は/u/であり、そこにアクセントが付与されるという間違った結果に導かれてしまう。そのため音節単位の場合、語末の音節だけを重音節として、それ以外は軽音節とすると(ル)と(ハ)にアクセントが付与される。また(19c)ではモーラ単位では(レ), (ラ), (ツ), (リ), (ベ)に、そして音節単位では(オ), (カ), (キ), (ケ)にアクセントが与えられる。

しかし、何故高低低低パターンだけが音節を韻律単位としないといけないのか、という疑問が残る。

6. 大和ことばのアクセントパターン

もともと大和ことばの単語のアクセントは次のようなパターンとなっている。

- (20) ●型(例,「火」) ●○型(例,「春」) ●○○型(例,「兜」) ●○○○型(例,「魂」)
 ○●型(例,「花」) ○●○型(例,「心」) ○●○○型(例,「鶯」)
 ○●●型(例,「桜」) ○●●○型(例,「傘」)
 ○●●●型(例,「鶏」)
 (金田一 1991. p 213)

(20)のアクセントパターンは東京アクセントを基にして作成されている。金田一(1991)はこの表から以下のことがわかると述べている。また●は/高/のトネーム, ○は/低/のトネームを表している。

- (21) a. (高)(低)のふたつのトネームから出来ており、それ以外のトネームはない。
- b. そうして、ひとつの拍は1個のトネームから出来ている。たとえば、(高)(低)の複合した拍はない。

(金田一 1991. p 213)

(21)の「トネーム」とは「声調 (tone)」のことであり、金田一(1991)独自の解釈で、/高/型、/低高/型、/低/型、/高低/型のことを表している。(21a)は/高/か/低/のふたつを用いて日本語のアクセントは出来上がっていることを示している。また(21b)からそれぞれのトネームが1モーラでできていることがわかる。

外来語も同様のアクセントパターンを持っていることがわかるが、○●●○型だけは存在しない。「語末の音節から数えて3音節目にアクセントが付与」されると考えると、●○○○型の「魂」[tamasii]の最後の2モーラが長音で1音節であり、全て語末の音節から数えて3音節目にアクセントが付与されていることがわかる。

「アルプス」も(11)のように、語末の2モーラだけを1音節の音韻単位とし、それ以外のモーラは全て1モーラで1音節と見なせば、「1モーラ・1モーラ・1音節(2モーラ)」となり、この3つの音韻単位の後ろから数えて3番目の音韻単位(音節もしくはモーラ)にアクセントが付与される。元来大和ことばの場合、「モーラ=音節」という関係が成り立っているので、モーラ単位でも音節単位でも構わない。大和ことばの場合、短縮語や複合語やその後に助詞がつく場合など以外は、比較的わかりやすいが、外来語の場合は取り入れられた過程がまず問題であり、外来語本来のアクセントを尊重したものなのか、それとも「日本語」としてモーラ単位に変化したものなのかの違いによって、アクセントは変化する。またそれに方言が関わるとかなり複雑になる。

7. ま と め

外来語の地名のアクセントパターンについて考察してきたが、2モーラ語と3モーラ語については、音韻単位を音節やモーラに関わらず、「最初の音節もしくはモーラにアクセントが付与される」。4モーラ語のパターンについては、「低高高高」、「高低低低」、「低高低低」という3つのパターンが存在していて、「低高高高パターン」の場合、韻律の単位はモーラであり、「語末から3番目のモーラにアクセントが付与される」という日本語本来のアクセントパターンである。しかし、平板調となりアクセントが下がらず、「タキ」が存在しないのは語の最後が2番目の音節が重音節ではなく、自立モーラから特殊モーラへピッチが下がることがないためであり、さらに語末の2音節が軽音節の連続で形成されており、この語末の軽音節連続が平板調を招くからである。

「高低低低パターン」の場合、HHかLLHの形を取り、後ろから2番目もしくは3番目の音節にアクセントが付与されると考えられる。このパターンはモーラを韻律単位としないで、音節を単位とする。語頭がLLの場合の軽音節連続にアクセントが付与されている場合、二番目のLの音節のピッチが下がり、Hの場合は自立モーラにアクセントが付与され、特殊モーラでピッチが下がる。つまり、このパターンの語はどの語も「高低」で始まる。途中でピッチが上がることはないので、そのまま「高低低低」のパターンとなる。

「低高低低パターン」の場合、LHLもしくはLLLLの形の音節パターンとなり、「後ろから3番目のモーラにアクセントが付与」される。LHLパターンの場合、語中の重音節がアクセントを誘引していると考えられる。この重音節が「タキ」の役割をしている。

以上のように、外来語の地名を発音するとき、音節を単位とする場合とモーラを単位とする場合が存在していることを示した。音節を単位としない場合、本来二重母音として考えられてきた [ai], [oi], [ui] は [a] [i], [o] [i], [u] [i] のように音節化された母音連続と捉えることができる。

韻律単位を音節とするのか、それともモーラとするのかによって、そのアクセントパターンは変化することがわかる。今後の研究では「なぜこのように韻律単位を変化させるのか」について、外来語以外の日本語の語彙を調べてその手掛かりを発見したい。そこには方言も関わってくる可能性がある。同じ日本語であっても、地域差があり、アクセントが異なっている。アクセント付与の土台となる韻律単位が地域ごとに異なっている場合、アクセント自体が違うのは理解できる。地域によっては、モーラを単位とする語と音節を単位とする語を分けているのかもしれない。窪蘭(2016)によると、鹿児島方言などはモーラではなく、音節をその単位としているということである。また外来語の取り入れられ方にも関係があると思われる。CMなどでそのアクセントが耳に残ることで、「一般的な」発音が出来上がってしまうこともある。

これら様々な要因が重なって、日本語の外来語のアクセントが生み出されるため、外来語の元にある原語アクセントを尊重する場合もあれば、尊重しない場合は日本語文法によって自然にアクセント付与されるのであるが、地域(方言)や「影響ある」個人(個人語)によって、「一般的な」日本語文法を大脳に持った人々による、自然に生み出されたものとは異なったアクセントが一般化する場合もある。

参 考 文 献

- Inagaki, Kayoko, Giyoo Hatano & Takashi Otake. 2000. The effect of kana literacy acquisition on the speech segmentation unit used by Japanese young children. *Journal of Experimental Child Psychology* 75: 70-91.
- Kawahara, Shigeto. 2016. Japanese has syllables: a reply to Labrune. *Phonology* 33: 169-194.
- NHK 放送文化研究所(編). 2013. 『日本語発音アクセント辞典』. 東京: NHK 出版.
- 大塚高信・中島文雄. 1989. 『新英語学辞典』. 東京: 研究社.
- 川上肇. 1977. 『日本語音声概説』. 東京: 桜楓社.
- 金田一春彦. 1991. 『日本語音韻の研究』. 東京: 東京堂出版.
- 窪蘭晴夫. 1993. 「日本語の音節量」. 『日本語のモーラと音節構造に関する統合的研究(2)』. 文部省重点領域研究「日本語音声」. 72-101.
- Kubozono, Haruo. 2004. *What does Kagoshima Japanese tell us about Japanese syllables?* 影山

- 太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語の種類』。東京：くろしお出版。75-92.
- 窪蘭晴夫. 2013. 『日本語の音声』。東京：岩波書店.
- Kubozono, Haruo. 2015. *Loanword phonology. Handbook of Japanese phonetics and phonology.* ed. by Haruo Kubozono. Berlin : De Gruyter.
- 窪蘭晴夫. 2016. 「日本語の二重母音」. 『現代音韻論の動向』。東京：開拓社。22-25.
- 窪蘭晴夫・太田聡. 2012. 『音韻構造とアクセント』。東京：研究社.
- Labrone, Laurence. 2012a. *The phonology of Japanese.* New York : Oxford University Press.
- Labrone, Laurence. 2012b. Questioning the universality of the syllable : evidence from Japanese. *Phonology 29* : 113-152.
- 櫻井啓一郎. 2013. 「日本語の音韻構造について」. 『創立九十周年 記念論文集』。松山：松山大学。217-249.
- 櫻井啓一郎. 2017. 「外来語のアクセントについて - 韻脚と韻律語の重要性」. 『松山大学論集』。松山：松山大学。473-500.
- Trubetzkoy, Nikolai S. 1969. *Principle of Phonology.* California : University of California Press.
- Vance, Timothy. 1987. *An introduction to Japanese phonology.* Albany : State University of New York Press.